

# “大学の格付けランキング”を超えて

## The ratings game

2010年3月4日号 Vol. 464 (7-8)

現在ある世界の大学格付けランキングには問題点が多く、それ自体の改善が必要だ。  
大学関係者は高順位を狙うべく努力しているが、格付け結果をより賢明に解釈する必要がある。

フランスのニコラス・サルコジ大統領は、同国の大学が世界ランキングでお粗末な結果になったことをかなり気にしているらしい。実際、「フランスの大学がベスト20に2校、ベスト100に10校入ること」を目標に設定するよう研究・高等教育省に命じた。こうした風潮はサルコジ大統領に限らない。今や、ランキングの順位向上をめざす動きが、世界各国の政策決定や研究資金提供の決定に影響を与えるようになってきている。しかし、大学の格付けには、それ自体に問題点があることはよく知られている。

大学の格付けシステムには多くのものがある。なかでも最も有名なものが、中国国内の大学と他の大学を比較することを目的として2003年に上海交通大学が創設した格付けと、英国ロンドンのTimes Higher Educationという雑誌が2004年に商業出版事業として始動させた格付けだ。これらのランキングでは、各大学の研究論文発表数、世間の評判などの重み付け指標を合計して、総合得点を算出している。

ところが数多くの論者が指摘してきたように、こうした現行のシステムでは、研究を偏重する傾向がみられる。そして、別の形の学問的業績や、学生教育において、批判的思考を育み、イノベーションを起こす力をどの程度効果的に身に付けさせているか、といった他の重要な要素が十分には考慮されていない。また、これらの格付けシステムでは、論文引用率の高い生物医学分野で大規模な講座をもつ大学が過大評価され、工学や社会科学を重視する大学が不利に扱われる傾向も

ある。それに加え、大学が評価対象の単位としてふさわしいかどうかにも疑問の余地がある。研究についての評価であれば、個々の学部や研究室を評価の単位としたほうが意味があるといつてよい。

それでも、格付け上位の大学は、こうした既存のシステム上の重大問題に疑問を投げかけず、ランキングが上だという事実を前面に押し出して満足してしまうことが非常に多い。その結果、格付けの信頼性が水増しされている。政策当局者やジャーナリストも、こうした格付けを額面どおりに受け取ることが多くなっている。要するにサッカーリーグの格付けランキングのような見方で、そもそも、こうしたやり方に意味があるのかどうか疑わしいのだ。

幸いなことに、次世代の格付けシステムが、こうした課題のいくつかに取り組み始めている (*Nature* 2010年3月4日号16ページ参照)。新しい格付けシステムは、より多元的なシステムをめざしている。大学を比較する際も、総合得点という単一の数値に従来ほど着目せず、研究、教育、地域社会や産業界への貢献といった、具体的な側面をより重視している。また、例えばハーバード大学のように運営資金の潤沢な大学と、限られた資金で卓越した成果をあげている小規模大学を同じ土俵で比較するのをやめ、類似性のある大学どうしを比較する方向へと動いている。

そして、これが最も重要かもしれないが、新しい格付けシステムでは、単純な順位表を並べる形から、それぞれの順位表を作るもとになったデータベースを公表する方向へと、舵を切り始めた。こう

した動きは、長い間待たれていたことだ。その結果、ユーザーは、自分にとって重要と思われる基準に基づいて、オンラインで大学を比較できるようになった。

信頼できる大学情報データベースこそが、透明性と説明責任のためのツールとして最も重要であることが浮き彫りになっている。この点で、政府や大学ができるのは、入手可能なデータの質的改善と量的拡大を進めていくことだ。また、例えば経済や社会への貢献など、大学の中核的機能を測定する方法を、さらに改善する努力を進めていく必要がある。これが進めば、欧州委員会が現在行っているような独自の格付けシステムの提案を例に出すまでもなく、さまざまな果実が得られるであろう。

大学は、格付けによって政策決定が過剰に影響を受けすぎないように、十分に注意を払う必要がある。このようなりスクは、2008年のイングランド高等教育資金配分会議の格付けの影響に関する報告書 (<http://go.nature.com/Ssi6Rr>) で取り上げられた。好むと好まざるとにかかわらず、格付けは今後も続く。格付けの乱用を防止し、格付けの限界について説明し、大学事業のより全体論的な評価を行うための活動を支援することが、大学にとって最も重要な課題だ。最近、経済協力開発機構 (OECD) が、高等教育は「わずかな数の基準では要約はできない。そうした基準を用いると、考慮される要素より無視される要素のほうが多くなる」と指摘し (<http://go.nature.com/Lld7d7>)、格付け万能の風潮に強烈な一撃を見舞った。 ■

(翻訳：菊川要)